

弥生時代の子供用貝輪論—古浦遺跡の貝輪によせて

木下尚子

はじめに

1. 弥生時代の子供の貝輪
2. 子供の貝輪の系譜
 - 1 貝輪使用型の分類
 - 2 I型 (二枚貝・笠貝貝輪独占型)
 - 3 II型 (二枚貝・笠貝貝輪共有型)
 - 4 III型 (南海産貝輪共有型)
 3. 結語

はじめに

弥生時代前期の墓地古浦遺跡では、16名の子供のうち6名が貝輪を着装していた。子供の貝輪着装例は弥生時代の西日本にしばしば認められ、また縄文時代晩期にも数例知られている。後者については秋田県柏子所貝塚（大和久 1966）、愛知県稻荷山貝塚（清野 1969）、宮城県里浜寺下囲貝塚（松本 1919）等がある。しかしこれらは、成人女性が貝輪を着装するという縄文時代の一般的な貝輪着装の原則（渡辺 1969）に照らすと例外的であり、その分布は東日本にかたよっている。

弥生時代について示せば、貝輪をはめた状態でみつかった子供は現在6遺跡13例知られる。着装状態は確認できなかったものの、貝輪が未成人骨にたしかに対応するという例を含めると、その数は14遺跡24例、人骨に必ずしも対応しないが子供用貝輪とみられるものの数は14遺跡122個にのぼる。またこれら遺跡の分布は古浦遺跡例をのぞくと中・北部九州と山口県西岸にかたよっており、甕棺墓や箱式石棺墓を伴う文化と関連が強い。

このようにみると、弥生時代における子供の貝輪習俗は縄文時代のそれとは連続せず、弥生時代に新たに登場していた可能性が高いといえる。この習俗は、どのように登場したのだろうか。以下、子供用貝輪の系譜について、古浦遺跡例を糸口に検討を試みたい。

1. 弥生時代の子供の貝輪

表1は現在しられる弥生時代の子供用貝輪一覧である。着装情況の明らかでないものも含め、14遺跡30例を示した。表2はこれらの内径である。以下各遺跡例について、他の装身具との関係に

もふれながら簡単に紹介していこう⁽¹⁾。

1-1 古浦

古浦遺跡は、日本海に面した砂丘に立地する弥生時代前期中ごろから中期の集団墓地である。埋葬人骨48体のうち成人は27体、未成人は16体である（九州大学医学部解剖学第二講座1998）。埋葬施設は弥生中期の石囲墓1基をのぞきすべて土壙墓である。1歳から5～6歳までの子供が左腕ないし両腕に貝輪を着装している。着装者の割合は未成人骨の38%にあたる。未成人用貝輪総数は39である。

使用された貝は二枚貝綱のハイガイと腹足綱のオオツタノハである。前者は36例、後者は3例である。ハイガイは三河湾、瀬戸内海、有明海などの内湾砂泥の干潟に生息するとされる（奥谷ほか1986）。ハイガイの生息可能な環境を遺跡周辺に求めると、中海が候補にあがるが、現在中海にハイガイは生息していないという。弥生時代初頭における生息の可能性も、周辺貝塚の貝等から判断すると、低いといわざるをえないようである⁽⁴⁾。オオツタノハは房総半島以南や南西諸島に分布する、ツタノハガイ科の南島種である。この時期オオツタノハが琉球列島から九州方面に搬入されていることは、すでに複数の遺跡例が示している（木下 1980）。

さて、古浦における装身具の特徴の一は、ヘアバンドの使用である。成人前頭部上に、人類学者が青斑とよぶ円形の銅銹痕がのこっている。金関丈夫によると「死後表層の軟部の崩壊後に、皮膚上にあった円形の銅板が骨面に接着し、水酸化することによって汚染されたものと考えられ」、「円形の銅板を固定したはちまき様のバンドの使用が想像される」。青斑のある成人は4例で、成人骨の15%にあたる。興味深いことに、同様の青斑が4～5歳の未成人頭骨のこめかみ部付近にもある。ヘアバンドは古浦遺跡の成人と未成人に、共通する装身具といえる。

特徴の二は、大人の装身具と子供のそれとが明らかに異なる点である。勾玉は前者にのみともない、貝輪・貝製臼玉は後者にのみともなう。

特徴の三は、貝輪材料が遠隔地の貝だという点である。ハイガイ・オオツタノハ貝輪は、ともに古浦例とほとんど同形のものが響灘・玄界灘・五島灘沿岸を結ぶ地域に分布し（木下 1982）、さらに前者は松江市西川津（川原・内田ほか 1980）に、後者は八束郡小浜⁽⁵⁾にもみられる。古浦人は当時の沿岸交易路を通して貝輪材料を入手していた可能性が高い。

1-2 土井ヶ浜

土井ヶ浜遺跡は、響灘に面した砂丘に立地する弥生時代前期中ごろから中期後半の集団墓地である（乗安ほか 1982,83,84,85,89）。11次にわたる発掘調査によってこれまでに123基の埋葬遺構と297体（成人194体、未成人39体）の人骨を検出している。埋葬施設は土壙墓・配石墓を主体とし石棺墓が加わる。子供用貝輪のうち着装状態の判明しているのは3号人骨と237号人骨に伴う貝輪10例

表1 弥生時代の子供用貝輪一覧 ※()内は着装数(右・左)

〔総数122〕

No.	遺跡・所在地	番号・遺構・年齢等	着装貝輪総数・貝種・着装状況	時期	その他・〔貝輪小計〕
1	古浦 島根県八束郡鹿島町古浦	1.2号人骨 土壙墓 2~3歳 2.23号人骨 土壙墓 1歳 3.24号人骨 土壙墓 2歳 4.28号人骨 土壙墓 1歳 5.29号人骨 土壙墓 2~3歳 6.32号人骨 土壙墓 4~5歳	14 ハイガイ(6-8)※1 4 ハイガイ(0-4) 6 ハイガイ(0-6) 5 ハイガイ(0-5) 5 オオツバハ他(3-2) 5 ハイガイ(0-5)	前期~中期	右オツバハ3-左ハイガイ2 〔39〕
2	土井ヶ浜 山口県豊浦郡豊北町神田上	1.3号人骨 石棺墓 幼児 2.128号人骨 土壙墓 幼児 3.237号人骨 土壙墓 幼児 4.採集 5.採集 6.採集 7.包含層 8.採集	9 マツバガイ(6-3) 8 ハイガイ 1 タマキガイ(0-1) 1 イモガイ科貝(ヨコ型) 1 イモガイ科貝(タテ型) 1 ユキノカサ 1 アツソデガイ ⁽²⁾ 1 アツソデガイ	前期~後期	1~4次調査 同上 同上 8次調査 F 8 南区第4層 9次調査 J 2 区 〔23〕
3	中ノ浜 山口県豊浦郡豊浦町川棚	1.3号B人骨 石棺墓 幼児	3 サルボウ	前期~中期	1次調査資料 改葬骨に伴出 〔3〕
4	宮ノ本 長崎県佐世保市高島町	1.18号人骨 石棺墓 8歳	1 マツバガイ	前期末~中期	着装状況を確認できない 〔1〕
5	前田山 福岡県行橋市前田	1.I地区49号人骨 貝棺墓 3~4歳	1 アカガイ	中期後半	着装状況を確認できない 〔1〕
6	大友 佐賀県東松浦郡呼子町大友	1.1次8号人骨 貝棺墓 幼児? 2.1次9号人骨 貝棺墓 幼児? 3.2次50号人骨 再葬墓 7歳 4. 1次4石棺墓外 小児?	3 タマキガイ 1 イモガイ科貝 7 オオツバハ(3-4) 3 タマキガイ	中期前半 前期末か 中期後半~後期初頭 前期~中期	唐津城保管資料 着装状況を確認できない 着装状況を確認できない 〔14〕
7	深堀 長崎県長崎市深堀町	1.8号人骨 二重塚墓 10歳前後 2.18号人骨 貝棺墓 4~5歳	9 タマキガイ(3-5) 20 サルボウ他 (9-11)	中期 中期	18号貝輪-右:サボウガ3,サトウガ1, タマキガ13,クイカ"サボウガ2,左:サボウガ2, サトウガ12,タマキガ17 〔29〕
8	金隈 福岡県福岡市博多区金隈	1.46号人骨 貝棺墓 5~6歳	1 スイショウガイ科貝 ⁽³⁾	中期前半	着装状況を確認できない 〔1〕
9	伯玄社 福岡県春日市伯玄町	1.85号人骨 貝棺墓 小児	1 スイショウガイ科貝	中期前半	着装状況を確認できない 〔1〕
10	観音堂 福岡県筑紫郡那珂川町片瀬	1.80号人骨 貝棺墓 幼児	1 スイショウガイ科貝	中期後半	1992年出土 〔1〕
11	姫方 佐賀県三養基郡中原町姫原	1.3号人骨 貝棺墓 小児	2 スイショウガイ科貝・ イモガイ(タテ型)	中期中頃	着装状況を確認できない 〔2〕
12	二塚山 佐賀県三養基郡上峰村提 6歳前後	1.2次56号人骨 貝棺墓 (4-0)	4 イモガイ科貝(タテ型)	中期前半	〔4〕
13	大道小学校校庭 熊本県山鹿市方保田	1. 貝棺墓 幼児	2 イモガイ科貝(タテ)	中期後半	着装状況を確認できない 〔2〕
14	陣山 熊本県熊本市出水町陣山	1.1号人骨 貝棺墓 7歳前後	1 スイショウガイ科貝	後期初頭	着装状況を確認できない 〔1〕

である（図3の3～11）。128号人骨の貝輪は老年の女性127号人骨の胸に抱かれて埋葬された幼児に伴うものである（図2の1～8）。127号の足元にハイガイ貝輪が8個まとまっており、いずれも小型であることから、これらを128号に対応する貝輪とみている。

埋葬遺構から遊離してしまった貝輪のうち、内径の大きさからみて子供用貝輪と判断できるものが5点ある。それらはイモガイ科ヨコ型貝輪と同タテ型貝輪（図4の3～4）、スイショウガイ科貝輪（図5の1～2）、ユキノカサ貝輪（図3の1～2）である。このうちのイモガイ科ヨコ型とスイショウガイ科貝輪には、同型の大人用貝輪がある。後者は男性が着装し、また女性人骨にも伴っている。土井ヶ浜出土の貝輪総数は40、子供用貝輪数は22で、これは全体の55%にあたる。

土井ヶ浜の装身具の特徴は、大人用と子供用の装身具が二つの面で区別されている点である。第一の区別は玉類と指輪の有無である。ガラス丸玉と指輪は大人にのみ伴い、ヒスイ勾玉は子供にのみ伴う。第二の区別は、両者に共通する装身具（管玉・貝製臼玉・貝輪）の貝輪においてみられる。スイショウガイ科とイモガイ科貝輪は大人と子供に共通に使用するが、二枚貝・マツバガイ・ユキノカサガイ貝輪は子供に限られる。

土井ヶ浜遺跡においては、装身具全体が大人と子供を“区別する機能”と“つなぐ機能”をあわせており、貝輪にもこの両面を認めることができる。

1-3 中ノ浜

中ノ浜遺跡は土井ヶ浜と同様、響灘に面した砂丘に立地する弥生時代前期中ごろから中期の集団墓地である（乘安ほか 1985, 潮見・岩崎ほか, 1984）。9次の調査によって95基の埋葬遺構と128体（成人80体、未成人27体）の人骨を検出している。埋葬施設は土壙墓・配石墓が石棺墓・覆石墓に相半ばし、小児用甕棺が加わる。子供用貝輪は第1次調査第3号石棺の改葬人骨（幼児）に伴っていた。貝輪は3点、1個は尺骨に通っていたというが、原状を復元することはできない。すべてサルボウ製で、入念なつくりである。

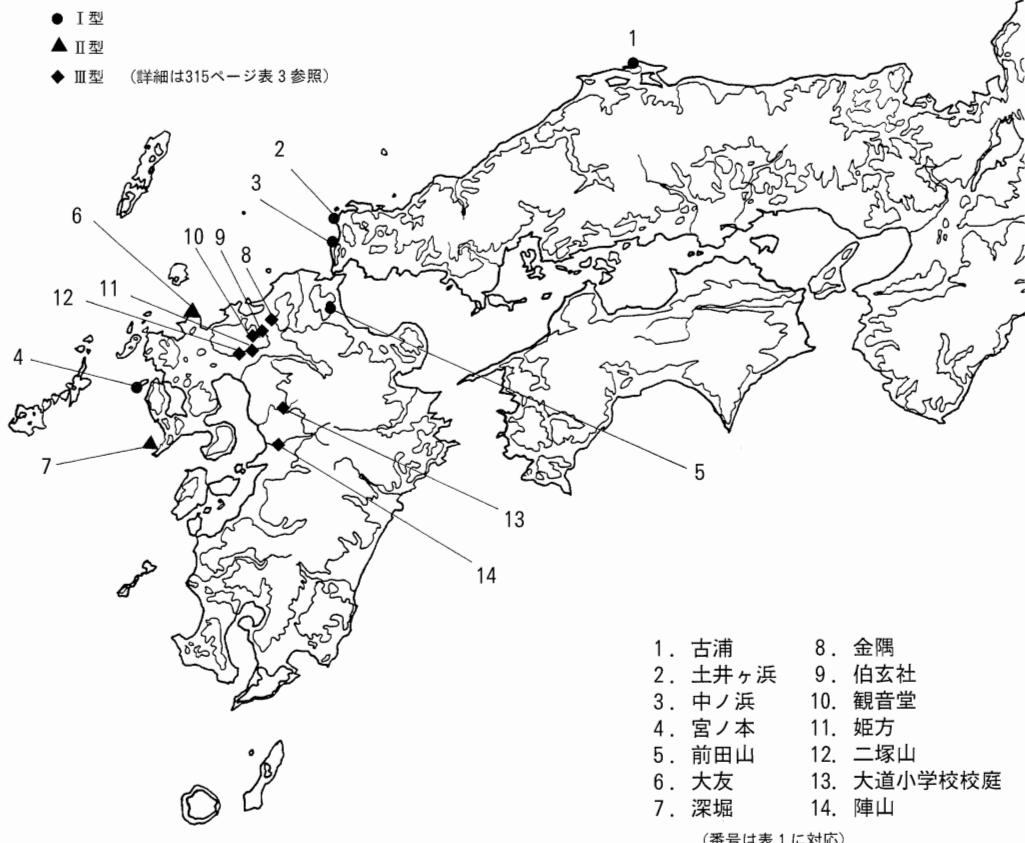
ここではスイショウガイ科・イモガイ科貝輪と貝製臼玉は大人用装身具、二枚貝貝輪は子供用装身具、両者に共通するのは管玉である。

1-4 宮ノ本

宮ノ本遺跡は、高島の海岸砂丘に立地する弥生時代前期末から中期中頃にいたる集団墓地である（久村ほか 1980）。4次の調査によって35基の埋葬遺構と45体（成人30体、未成人9体）の人骨を検出している。埋葬施設は土壙墓と石棺墓が相半ばし、これに小児用甕棺が加わる。

子供の貝輪は、18号人骨（8歳）に伴ったマツバガイ1点に留まる（図3の12）。貝輪は胴部附近にあったが、着装状態をとどめてはいなかった。これに対し女性の貝輪着装者は6体、貝輪は12個を数える。5体は二枚貝貝輪を、1体はイモガイ科貝輪を着装している。マツバガイ貝輪は内側、

図1 弥生時代の子供用貝輪出土地



表面ともによく研磨されている。

宮ノ本における大人と子供の貝輪の違いは明瞭である。また女性に限って貝輪をはめており、二枚貝が主体をしめる点は縄文文化の伝統に共通する。

1-5 前田山

前田山遺跡は、京都平野をのぞむ低丘陵上に展開する集団墓地である（長峯・水島ほか 1980）。I区において弥生前期末から古墳時代前期の墓地を検出している。遺構は土壙墓が大半を占め、甕棺墓、石棺墓等が加わる。248基の埋葬遺構のうち、人骨の確認できたものは21基をすぎない。

この中の1基の甕棺内に貝輪があった（図2の12）。棺内には3～4歳の幼児骨が残存していた。貝輪は、右腕の骨が存在したと報告者が推定する位置でみつかっている。着装状態はわからない。木村幾太郎氏は、着装されていたのではなく副葬品であった可能性が強いとしている。また子供が貝輪を伴っていることに関して、「前代からの呪術的意味を保持して子供に副葬したもの」としている（木村 1987）。貝輪はアカガイ製で、入念な研磨がほどこされている。

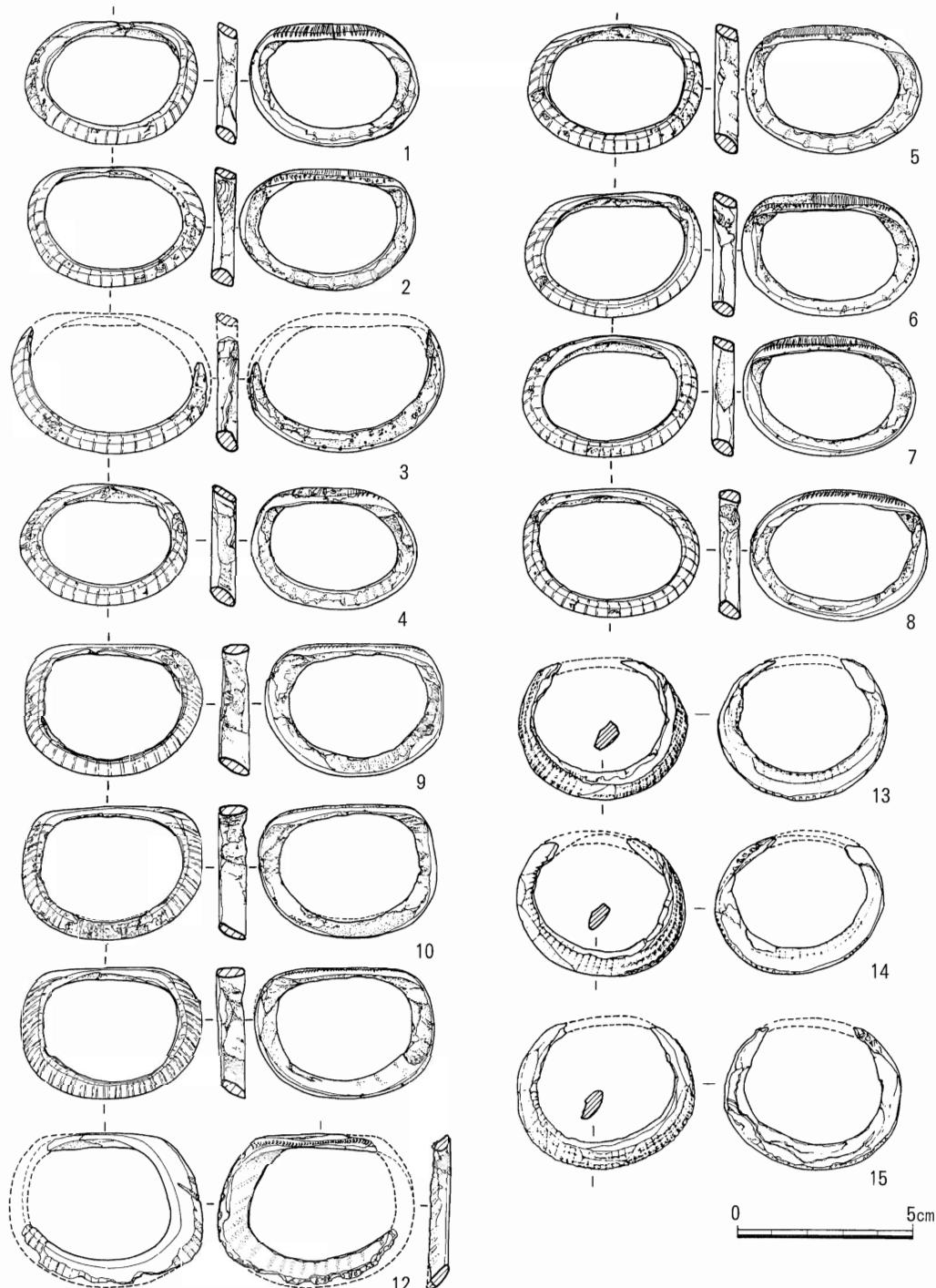


図2 子供の貝輪（二枚貝貝輪）

1~8 土井ヶ浜128号人骨共伴

9~11 中ノ浜3号石棺B人骨共伴

12 前田山I49号人骨共伴

13~15 大友（1次）4号石棺外

表2 弥生時代子供用貝輪の大きさ一覧

貝輪番号は着装の場合手首側から肘側に、非着装・着装状況不明の場合は内径の小さい方から大きい方に順に並べる。() 内は復元推定値、単位:mm

遺跡 No.	遺跡・人骨番号・着装貝輪・貝輪番号	貝輪内径		遺跡 No.	遺跡・人骨番号・着装目輪・目輪番号	貝輪内径	
		長径	短径			長径	短径
1 古浦2号人骨 (2~3歳)	右:ハイガイ	1 41	31	2 土井ヶ浜3号人骨 (幼児)	マツバガイ 1	45	33
		2 41	32			2 45	36
		3 43	32			3 46	36
		4 46	30			4 48	37
		5 45	33			5 50	38
		6 44	31			6 50	41
	左:ハイガイ	1 42	28			7 (56)	(41)
		2 42	29			8 57	44
		3 41	29			9	
		4 43	31	土井ヶ浜128号人骨 (幼児)	ハイガイ 1	36	25
古浦23号人骨 (1歳)	左:ハイガイ	1 42	28			2 39	28
		2 40	29			3 39	28
		3 40	30			4 40	29
		4 42	31	土井ヶ浜237号人骨 (幼児)	左:タマキガイ 1	40	30
		5 46	32			5 40	30
古浦24号人骨 (2歳)	左:ハイガイ	1 42	27	土井ヶ浜237号人骨 (幼児)	左:タマキガイ 1	44	40
		2 38	30	採集	イモガイ科貝 (ヨコ型) 1	33	33
		3 38	28	採集	イモガイ科貝 (タテ型) 1	38	30
		4 40	27	採集	ユキノカサ 1	42	30
		5 39	28	4層	アツソデガイ 1	(53)	(38)
		6 39	28	採集	アツソデガイ 1	45	29
古浦28号人骨 (1歳)	左:ハイガイ	1 39	27	3 中ノ浜1次3号石棺人骨 (幼児)	ハイガイ 1	39	29
		2 41	27			2 39	29
		3 41	27			3 40	31
		4 42	27	4 宮ノ本18号人骨 (8歳)	マツバガイ 1	51	43
		5 42	28				
古浦29号人骨 (2~3歳)	右:オツタハ	1 45	32	5 前田山I地区49号人骨 (3~4歳)	アカガイ	(42)	32
		2 47	32				
		3 48	33	6 大友1次3号人骨 (幼児?)	タマキガイ 1	42	(31)
左:ハイガイ		1 44	30			2	
		2 45	35			3	
古浦32号人骨 (1歳)	左:ハイガイ	1 ()	()	大友1次9号人骨 (幼小児?)	イモガイ科貝 1	(64)	(50)
		2 ()	()				
		3 ()	()				
		4 ()	()				
		5 ()	()				

遺跡 No.	遺跡・人骨番号・着装貝輪・貝輪番号	貝輪内径		遺跡 No.	遺跡・人骨番号・着装貝輪・貝輪番号	貝輪内径	
		長径	短径			長径	短径
7	大友2次50号人骨 右:オツタハ (7歳)	41	28		左:サルボウ	1	
		2	54			2	
		3	51		サトウガイ	3	
		4	47			4	
		左:オツタハ	1		タマキガイ	5	
		2	49			6	
		3	50			7	
		大友1次4号石棺外人骨 タマキガイ (小兒?)	1	47		8	
		2	48			9	
		3	49	40		10	
		深堀8号人骨 (10歳前後)	右:タマキガイ	1		11	
		2		8	金隈46号人骨 スイショウガイ科貝 (5~6歳)	1	42
		3		9	伯玄社85号人骨 スイショウガイ科貝 (小兒)	1	(40)
		左:タマキガイ	1	10	観音堂80号人骨 スイショウガイ科貝 (3歳くらい)	1	32
		2		11	二塚山2次59号人骨 イモガイ科貝 (幼兒?) 右	1	(46)
		3			2	~	~
		4			3	47)	39)
		5			4		
		深堀18号人骨 (4~5歳)	右:サルボウ	1	大道小学校校庭 (幼兒)	1	45
		2		12		2	35
		3		13	姫方3号人骨 イモガイ科貝 (小兒) スイショウガイ科貝	1	46
		サトウガイ 4		14	(7歳前後)	1	39
		タマキガイ 5				1	33
		6				42	(34)
		7				1	46
		タケカワサトウ 8				1	(31)
		9					

他に装身具として土壙墓2基と石棺墓1基から管玉が検出されている。遺構の大きさからみて成人に伴うものであろう。

1-6 大友

大友遺跡は、玄界灘に面した砂丘に立地する弥生時代前期中頃から後期初頭に至る集団墓地である（東中川・藤田ほか 1981）。4次の調査により128基128体（成人76体、未成人25体）の埋葬人骨が検出されている。埋葬施設では土壙墓、石棺墓、甕棺がほぼ同じ割合で存在する。

子供の貝輪着装は1例で、7歳児が両腕にオオツタノハ貝輪を着装していた。また遺物の対応がやや不確かであるが、1次8号人骨に二枚貝貝輪3個、1次9号人骨にイモガイ科貝輪1個が伴っている。1次4号石棺外で検出された二枚貝貝輪3個は人骨と対応しないが、大きさから未成人用貝輪と判断できる。大友遺跡の貝輪総数71個のうち、子供の貝輪は14個、全体の20%にあたる。

大友遺跡において、子供にのみ伴う装身具を認めることはできない。これに対しガラスおよびヒスイ製玉類、ゴホウラ貝輪は大人にのみ伴っている。貝輪（二枚貝・イモガイ科貝・オオツタノハ）と管玉は、大人と子供に共通する装身具である。このように大友遺跡では、子供側から大人を区別する装身具がみられず、かわって両者をつなぐ装身具が多い。

1-7 深堀

深堀遺跡は、五島灘に面した砂丘に立地する、弥生・弥生時代前期末から中期中ごろまでの集団墓地である（内藤ほか 1967）。3次の発掘調査によって、27基の埋葬遺構と26体（成人13体、未成人14体）の人骨が検出された。埋葬施設は土壙墓を主体とし、甕棺墓と石棺墓（1基）が加わる。

貝輪着装者は女性と子供に限られ（女性5名、未成人2名）、貝輪は二枚貝製のみで、これらの点は縄文時代の習俗に共通している。また、ここでは4～5歳の子供が両腕に20個の貝輪をはめている。同遺跡の女性の貝輪着装数は2個から24個なので、数の多少は年齢の高低によるものではなさそうである。深堀例は、遺跡の弥生人が縄文時代的要素を継承する一方で、子供に関してすでに縄文時代とは異なる貝輪習俗をもっていたことを示している。

1-8 金隈

金隈遺跡は福岡平野をのぞむ丘陵に位置する、弥生時代前期末から後期初頭に至る集団墓地である（折尾ほか 1972、橋口・折尾 1973、中橋 1985）。6次の発掘調査によって、469基の埋葬遺構と136体の人骨（成人101体、未成人35体）が検出されている。埋葬施設は甕棺墓を主体とし、これに土壙墓と石棺墓（2基）が加わる。

146号甕棺出土のスイショウガイ科貝輪については、すでに折尾学氏と橋口達也氏による詳細な報告がある。それによると、出土情況から判断して貝輪はすでに着装状態ではなく副葬品と考えられ、その形態は土井ヶ浜型に属し、左手着装にふさわしい形状とされる。金隈遺跡には他に男性の

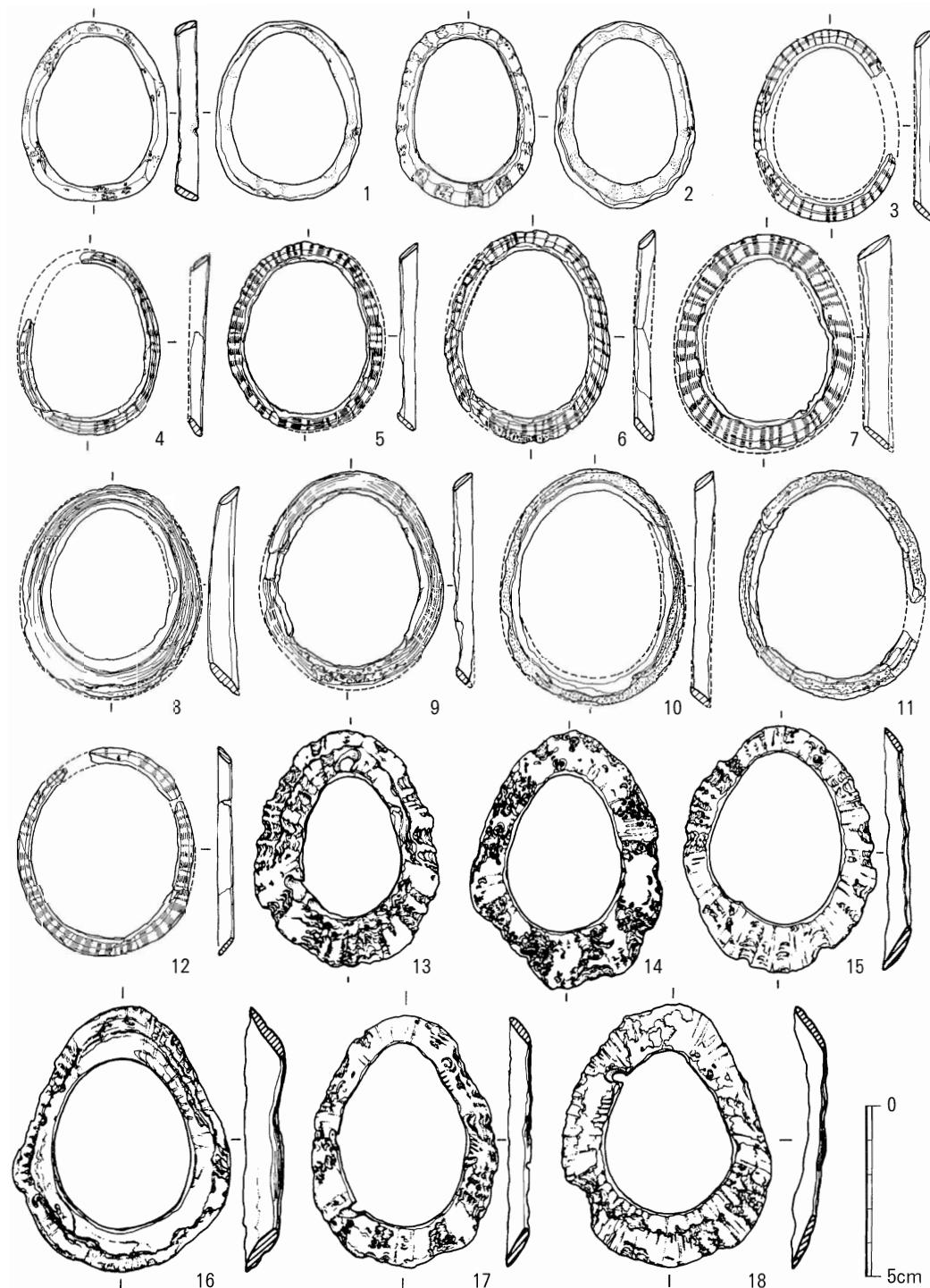


図3 子供の貝輪（笠貝貝輪）

1. 土井ヶ浜（11次）採集 2. 土井ヶ浜（1～5次）採集 3～11. 土井ヶ浜3号人骨着装
12. 宮ノ本18号人骨共伴 13～18. 大友（2次）50号人骨着装

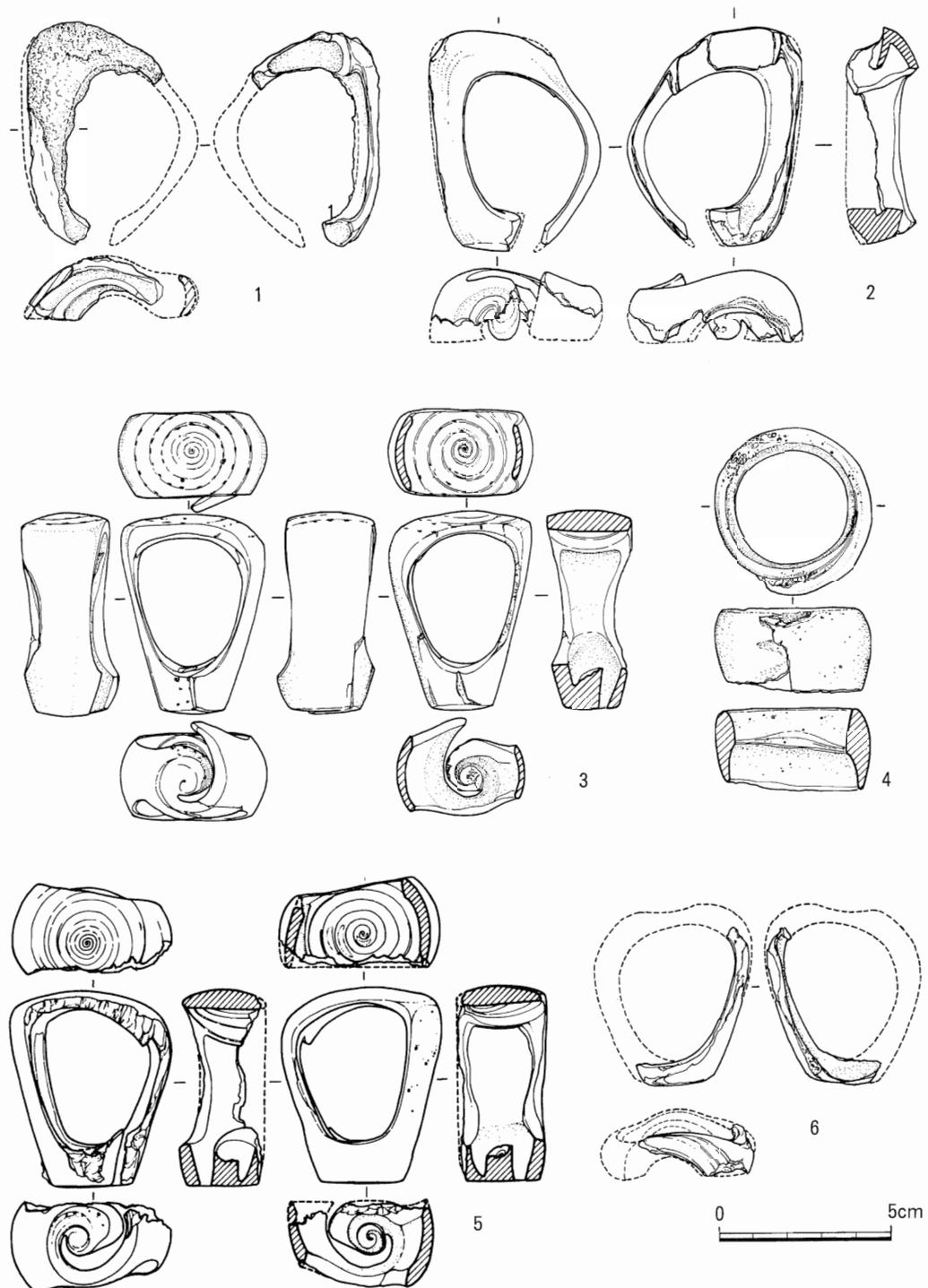


図4 子供の貝輪（南海産貝輪）

1. 阿山1号人骨共伴（スイショウガイ科貝） 2. 金隅46号人骨共伴（スイショウガイ科貝）
 3・4. 土井ヶ浜（1～5次）採集（イモガイ科貝） 5. 姫方3号人骨共伴B（イモガイ科貝）
 6. 伯玄社85号人骨共伴（スイショウガイ科貝）

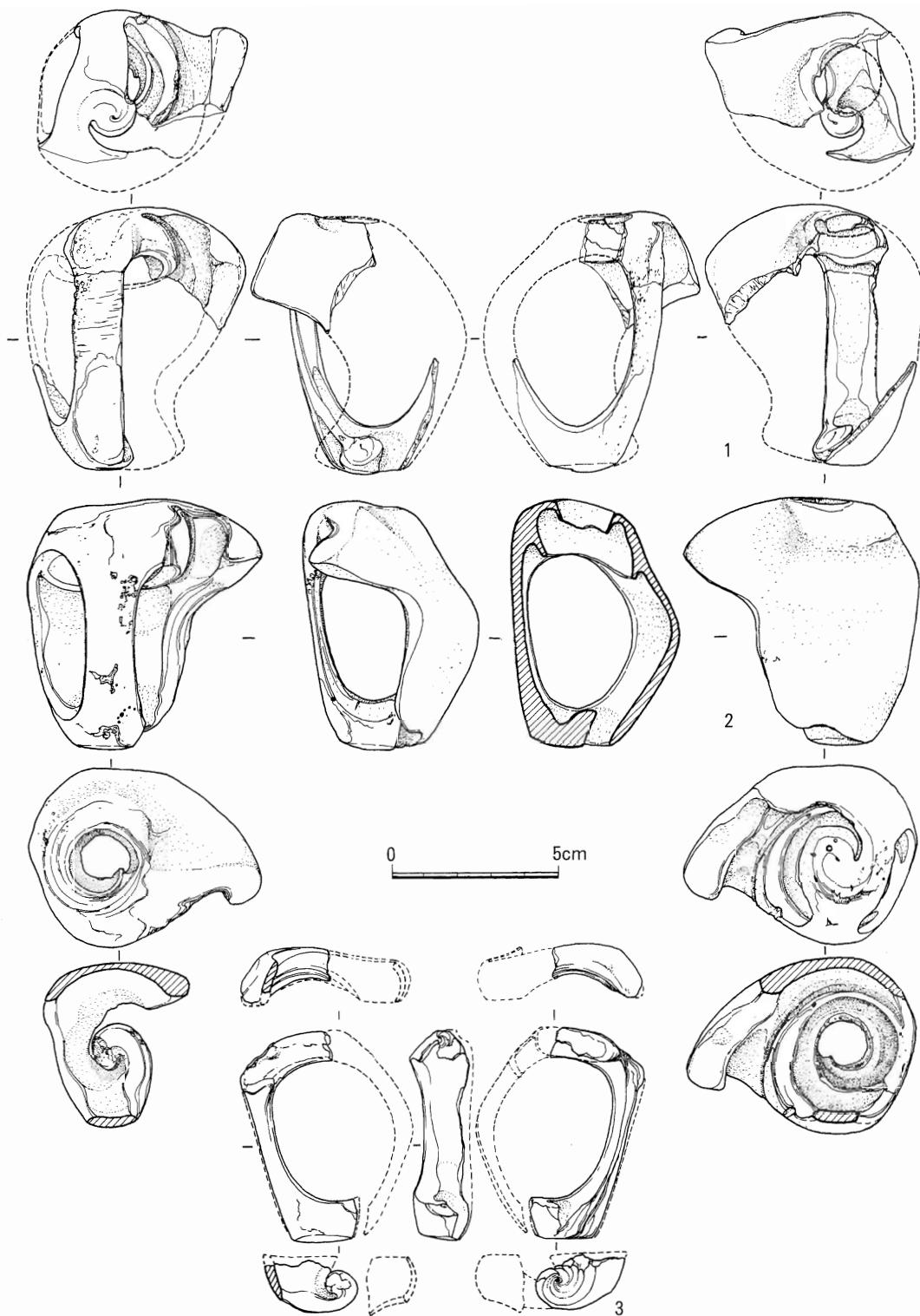


図5 子供の貝輪（スイショウガイ科貝輪）

1. 土井ヶ浜（8次）4層出土
2. 土井ヶ浜（9次）表層出土
3. 姫方3号人骨共伴A

貝輪着装例があるので、幼児の貝輪着装もこれに共通する習俗と理解できる。金隈において他の装身具は極めて乏しく、成人に石製垂飾りが1点伴うにすぎない。これまでの表現にしたがえば、成人と未成人を区別する装身具は玉で、つなぐ装身具はゴホウラ貝輪だといえよう。

1-9 伯玄社

伯玄社遺跡は筑紫平野をのぞむ低丘陵上に位置する、弥生前期後半から中期にいたる集団墓地である（渡辺ほか 1968）。発掘調査によって、182基の埋葬遺構と11体（成人10体、未成人1体）の入骨が検出されている。埋葬施設は甕棺墓を主体とし、土壙墓が加わる。

伯玄社遺跡で検出された装身具は子供用のスイショウガイ科貝輪1点だけである（図4の6）。85号甕棺に伴う貝輪は保存状態が悪く、全体の4割ほどを留めるにすぎない。復元すると諸岡型貝輪に近い形状になる。

1-10 観音堂

観音堂遺跡は、那珂川によって開析された低地をのぞむ低丘陵上に位置する、弥生時代前期末から中期後半にいたる集団墓地である（澤田ほか1994）。1987年と1992年に発掘調査され、弥生時代の甕棺墓92基と土壙墓12基、27体の人骨が検出された。報告された装身具は、74号甕棺の男性に伴う12個の管玉と、80号甕棺の幼児に伴うスイショウガイ科貝輪である。

スイショウガイ科貝輪は、中期中頃から後半の甕棺墓（K80）内で、幼児の尺骨が貫通した状態でみつかった。着装腕の左右については報告されていない。貝輪はやや分厚い諸岡型貝輪である。

1-11 姫方

姫方遺跡は佐賀平野をのぞむ低い独立丘陵上に位置する、弥生時代中期前半から後期前半の集団墓地である（木下ほか 1974）。10次にわたる発掘調査によって、430基以上の埋葬遺構が検出されている。埋葬施設は甕棺墓を主体とし、石棺墓と土壙墓が加わる。

貝輪は中期中ごろの小児用甕棺（第3号甕棺）内に2点遺存したが、人骨との関係は不明である。貝輪の内径の大きい方を仮にAとし、小さい方をBとしよう。貝輪Aはスイショウガイ科貝輪で、全体の4割を失い、保存状態はよくない（図5の3）。復元形は金隈出土の子供用貝輪と同様である。貝輪Bはイモガイ科貝輪である（図4の5）。保存状態はあまりよくないがほぼ完形で、土井ヶ浜の小型イモガイ科貝輪によく似ている。貝輪Aを意識したのか、本来左右対照に近い形状のイモガイの一方の肩部を擦りおとして、スイショウガイ科貝輪の形状に近づけようとしたらしい。

姫方遺跡における装身具は2点の貝輪だけである。

1-12 二塚山

二塚山遺跡は佐賀平野をのぞむ段丘上に位置する、弥生時代前期末から後期前半にいたる集団墓地である（七田ほか 1979）。一つの段丘尾根を占拠している墓地のほぼ全域を完全に調査した貴重

な例である。発掘調査によって241基の埋葬遺構と64体（成人52体、未成人6体）の人骨を検出している。埋葬施設は甕棺墓を主体とし、石棺墓と土壙墓が加わる。

子供の貝輪は59号人骨（6歳前後）の右前腕に通った状態で4個みつかった。すべてイモガイ科貝製で、保存状態は良好ではない。いずれも全体の3割を留めるにすぎず、復元すると橢円形に近い円型の貝輪になる。

二塚山では、他に成人（71号甕棺）がゴホウラ貝輪を右腕に8個着装しているので、大人も子供も共通して南海産貝輪をはめていたことがわかる。また成人用土壙墓に伴ってガラス勾玉・管玉・小玉がみつかっている。二塚山において玉類は大人の装身具だったらしい。

1-13 大道小学校校庭

大道小学校校庭遺跡は、菊池川によって開析された盆地をのぞむ台地上に位置する、弥生中期後半を中心とする甕棺墓地である（隈 1983）。甕棺の発見はすでに1969年にさかのぼるが、最近山鹿市教育委員会が発掘調査し、現在調査報告書作成中であるため、調査を担当された中村幸史郎氏の教示と実見によってのべる。

未成人貝輪が検出されたのは、中期後半の小児甕棺内である。甕棺内に人骨はのこっていたが着装情況等不明である。貝輪は小型のイモガイ科タテ型貝輪で、同様の大きさの貝輪が、2個重なったまま遺存している。他の装身具等との関係は不明である。

1-14 陣山

陣山遺跡は白川流域の洪積台地上にある弥生時代の甕棺墓地である（熊本市教育委員会 1972）。1956年下水道工事中一組の合口甕棺がみつかり、乙益重隆氏が発掘調査した。甕棺は後期初頭の型式で、中に子供の骨と貝輪の残片があった。わたしは国学院大学陳列室において、貝輪を実見した。

貝輪はスイショウガイ科貝製で、保存状態はあまりよくない（図4の1）。全体の6割を遺すにすぎないが、復元すると金隈例と同様の形状になる。

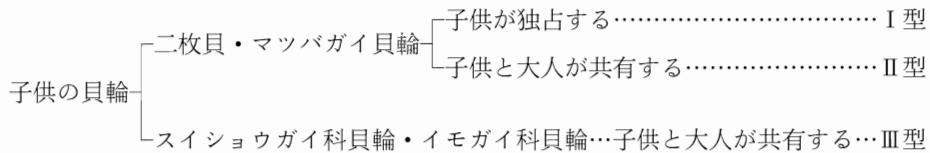
2. 子供の貝輪の系譜

2-1 貝輪使用型の分類

子供の貝輪に注目して弥生時代の装身具をみると、弥生時代の装身具には“大人と子供を区別する機能”と“つなげる機能”的あることに気づく。このような視点で表1を並べ替えたのが表3である。

子供の貝輪として特徴的な二枚貝・マツバガイ貝輪のあり方に注目してみよう。子供用貝輪はまず、二枚貝または笠貝貝輪を伴うグループと、これを伴わないグループにわかれる。前者はさらに、二枚貝・マツバガイ貝輪を子供が独占するグループと、子供と大人とが共有するグループにわかれる。

る。また後者では南海産貝であるスイショウガイ科貝・イモガイ科貝を使用し、子供と大人は多くの場合貝輪を共有している。これらをそれぞれⅠ、Ⅱ、Ⅲ型に分けた。



以下各型について検討していこう。

2-2 Ⅰ型（二枚貝・笠貝貝輪独占型）

近海産の二枚貝・マツバガイ貝輪を子供が独占するこのグループは、子供と大人の区別を子供の側から示している点に特徴がある。反対に、大人の側から子供を区別する装身具は玉類などにみられるものの、一貫性に欠けている。

2-2-1 マツバガイ貝輪の系譜

子供だけの装身具にはマツバガイ貝輪の使用が顕著である。マツバガイは本州・四国・九州・韓半島にひろく生息する、近海に一般的な笠貝である。しかし貝輪としての利用は多くない。例をあげると、長崎県対島佐賀貝塚の1例（縄文後期、正林ほか 1989）、広島県帝釈峠馬渡岩陰遺跡の縄文前期前半の層からみつかったよく研磨されたマツバガイ貝輪破片5点（稻葉ほか 1979）、福井県鳥浜貝塚（縄文前期、森川 1979）の1点、岩手県貝鳥貝塚（縄文後晩期、草場ほか 1971）の1点等である。

マツバガイと似た使用の認められるのが南海産笠貝のオオツタノハと北方産笠貝のユキノカサである。東日本の縄文遺跡では、伊豆諸島産のオオツタノハが早くから頻繁に登場している（今橋 1980）。ユキノカサ貝輪は佐賀貝塚、福島県大畑貝塚（縄文中期、小林ほか 1975）、網取C地点貝塚（縄文前・後期、渡辺ほか 1968）、寺脇貝塚（縄文後・晩期、渡辺ほか 1966）、兵庫県賀茂遺跡（弥生中期、新井 1915-16）等に知られる。

マツバガイ、オオツタノハ、ユキノカサはともに生息域を異にする貝であるが、外見上はともに笠状をなし、加工に際して同心円状にわれやすく、素材として共通の性質をそなえている。これらは分類学上でツタノハガイ科、ユキノカサガイ科であるが、原始腹足目カサガイ類としての呼称がある。笠貝貝輪はそれぞれ縄文時代に使用例があるものの、多くは時期・分布域において弥生時代の使用例と隔たりがある。

ここで注目したいのが朝鮮半島と中国の類例である。上老大島山登貝塚（韓国慶尚南道統営郡欲知面老大里、縄文後-晩期併行期、金・朴 1989）の女性は、左前腕に貝輪を3個着装していた。貝種は二枚貝（ベンケイガイ2個）とマツバガイ（1個）である。また中国吉林省延吉小宮子（縄

表3 子供用貝輪を中心としてみた弥生時代の装身具使用情況

使用型	No.	遺跡名	a 子供だけの装身具	b 子供と男性の装身具	c 子供と女性の装身具	d 大人だけの装身具
I	1	古浦	貝輪(二枚貝・オツタハ) 貝白玉	ヘアバンド 管玉	ヘアバンド 管玉	勾玉
	2	土井ヶ浜	貝輪(二枚貝・マツバガイ) 貝輪(コキガサ)* ヒスイ勾玉	貝輪(シヨウガ科・イカガ科)* 管玉 貝白玉	貝輪(シヨウガ科・イカガ科)* 管玉 貝白玉	指輪 ガラス丸玉
	3	中ノ浜	貝輪(二枚貝)	管玉	管玉	貝白玉 貝輪(コキガサ科)
	4	宮ノ本	貝輪(マツバガイ)			貝輪(二枚貝・イカガ科)
	5	前田山	貝輪(二枚貝)			管玉?
II	6	大友		貝輪(イカガ科・二枚貝) 管玉	貝輪(イカガ科・オツタハ) 管玉	貝輪(コキガ) ガラス管玉・丸玉 ヒスイ勾玉・丸玉
	7	深堀			貝輪(二枚貝)	管玉
III	8	金隈		貝輪(シヨウガ科)		石製垂飾
	9	伯玄社	貝輪(シヨウガ科)→			
	10	觀音堂	貝輪(シヨウガ科)→			
	11	姫方	貝輪(シヨウガ科・イカガ)→	→		
	12	二塚山	貝輪(イカガ科)→	→貝輪(シヨウガ科)		ガラス勾玉・小玉・管玉
	13	大道小学校庭	貝輪(イカガ科)→			
	14	陣山	貝輪(シヨウガ科)→			

貝輪使用型

I型：二枚貝・笠貝貝輪独占型（子供が二枚貝・笠貝貝輪を独占的に使用）

II型：二枚貝・笠貝貝輪共有型（子供と大人が二枚貝・笠貝貝輪を使用）

III型：南海産貝輪共有型（子供と大人が南海産貝輪を使用）

* 着装状態ではなかったが、貝輪の大きさから子供用と推定されるもの

→他遺跡の情況と比較して、表内位置の移動が可能であることを示す

文後期晩期－弥生中期併行、三上 1971) の石棺内検出の貝輪にも、マツバガイに酷似するものがある⁽⁶⁾。縄文晩期にマツバガイとユキノカサ貝輪を出した対島佐賀貝塚には、韓半島からもたらされたキバノロ製品がみられ、彼地との関係をうかがわせる（正林ほか 1989）。弥生時代の西日本でいっせいに始まる笠貝類の使用習俗を、大陸の習俗の影響とみることはできないだろうか。

2-2-2 笠貝と二枚貝の共存

古浦29号人骨は右腕にオオツタノハ貝輪を3個、左腕に二枚貝貝輪を2個着装していた。この事実は、古浦人にとってオオツタノハも二枚貝も同様に使用できる貝輪素材とみなされていたことを示唆する。同じことは先にあげた韓国山登貝塚の二枚貝とマツバガイの併用にもいえそうである。

二枚貝貝輪と笠貝貝輪は、密接な関係にあったといえる。

ところで、縄文時代の貝輪は二枚貝のフネガイ科やタマキガイ科を中心とした女性専用の装身具であり、そこには縄文文化の精神性が込められていた（渡辺 1969）。一方弥生時代の貝輪素材であるハイガイもフネガイ科の貝で、貝殻の大小の違いころあれ外見上双方はよく似ている。つまり二枚貝貝輪にかんする限り、弥生時代と縄文時代の素材は、同類なのである。しかし弥生文化の貝

輪は、これを子供がはめている一点において、縄文の貝輪と文化的にはっきり区別される。したがって、たんに素材が共通していることをもって、弥生時代の貝輪が縄文時代の貝輪の延長にあるとはいえない、わたしは考えている⁽⁷⁾。二枚貝貝輪と併用された笠貝貝輪がこの問題の鍵になるだろう。前述のように笠貝貝輪の着用を大陸的習俗とみれば、I型の貝輪習俗は笠貝貝輪の着装習俗を仲立ちに作られた、弥生文化独自の貝輪習俗ということができよう。

2-3 II型（二枚貝・笠貝貝輪共有型）

子供の貝輪と同じ種類のものを成人もはめるこのグループでは、貝輪は大人との連続性を示す装身具として意味をもつ。以下大友遺跡の支石墓に伴う貝輪を糸口に、大友人の貝輪習俗を検討し、それにもとづいて子供の貝輪をみていこう。

大友遺跡の57号支石墓では男性が右腕に3個の貝輪を着装していた。3個のうち2個はゴホウラ製組合せ貝輪で、1個は二枚貝製組合せ貝輪である。両者の形態はほぼ同一で、両者間に貝種による製作意識の差をうかがうことはできない。ここでは貝は自然形状の如何や生息域の遠近を問わず、貝殻は単なる素材である。

「貝は単なる素材」という見方を敷衍して大友出土の貝輪67点をみると、貝輪が北部九州型の貝輪7点を除き、すべてほぼ円形をなしていることに気づく。円形貝輪は大友遺跡の貝輪の主体をなしており、これらは着装ルールにおいて北部九州弥生社会の貝輪とも、縄文的な伝統の貝輪とも異なっている。大人・子供・男・女を問わず、みな同様に貝輪を着装しているからである。

こうした背景に、大友遺跡が北部九州の弥生社会に南海産の大型巻貝を供給した、貝交易の基地であったという事情がある。大友人のもとに貝輪素材が豊かに集積していたことが、彼らに自由な貝輪習俗を実現させた一因であることは否めない。しかし貝輪を円形に統一する嗜好や、その素材が二枚貝でもゴホウラでもイモガイでも、あるいはオオツタノハでも区別をしないという価値感や、男女・大人子供それぞれが貝輪をはめるという習俗には、しかるべき根拠があるはずである。支石墓の3個の貝輪は、こうした大友遺跡の貝輪習俗を凝集した例といつていい。支石墓という朝鮮半島系の墓を背景にしているところからみて、大友人の貝輪習俗が、朝鮮半島の影響を受けている可能性は高いと思う。

2-4 III型（南海産貝輪共有型）

III型では子供は南海産貝輪のみを着装する。ここではI型やII型に特徴的な二枚貝や笠貝類の使用はまったくみられず、他の装身具もきわめて少ない。

III型の遺跡のうちほぼ全面発掘をおこなった金隈と二塚山では、貝輪を着装した成人男女例がそれぞれみつかっている。発掘調査面積の小さい遺跡、例えば伯玄社では、近くの門田遺跡において男性のゴホウラ貝輪着装例があり、大道小学校校庭では、菊池川下流の年の神遺跡において男性の

ゴホウラ貝輪着装例がある。同様の他例についても、付近に成人の貝輪着装例を容易に求めることができる。

以上から、Ⅲ型の各遺跡において、子供に共通する貝輪を大人が本来はめている可能性は、高いといえる。したがって、これらは表3のa欄ではなくb欄またはc欄におさまるべきものとみていよい。すなわちⅡ型とⅢ型は同様の装身ルールにもとづいているといえる（表3の矢印はこのことに対応する）。

ところで、Ⅲ型における貝輪の特徴は、貝殻全体を使用して螺構造をとりこんだ立体的な造形にあり、この点でⅠ型やⅡ型の主体をなす平たく円い貝輪と決定的に異なっている。わたしはⅢ型の貝輪を、北部九州弥生人が創造した農耕祭祀用の呪具だと考えている。Ⅲ型において貝輪をはめる人物の存在比は、Ⅰ型やⅡ型におけるよりずっと低く（例えばⅢ型の金隈では1.5%、Ⅰ型の古浦では12.5%、Ⅱ型の大友では14%）、貝輪着装にきびしい社会的選択が行われていたことを示している。子供の場合も同様である。Ⅲ型における子供の貝輪は、こうした厳しい社会的選択が幼小時からなされていたことを示す点で、Ⅰ型やⅡ型と異なっている。

3. 結語

子供と大人の貝輪習俗について、もう少し整理しよう。表4は表3から貝輪のみ抜き出して同様にまとめたものである。ここでは弥生時代の貝輪を、二枚貝貝輪、笠貝貝輪、南海産貝輪の3タイプに分類した。着装状態ではない資料については（ ）を用いて示した。表5では表4のb・cを一括し、また（ ）内の例も1例とみなして、さらに単純化した。

表5をみよう。使用型のⅠ型とⅢ型は、貝輪の種類と着装習俗において対照的である。Ⅰ型では子供が二枚貝・笠貝貝輪をほぼ独占する一方で、少数の人が南海産貝輪をはめている。ここでは子供と大人の貝輪のはめ方が明らかに異なっている。これに対しⅢ型では両者の貝輪は南海産貝輪に統一され、他種の貝輪がまったくない。貝輪習俗がここでは単一的である。Ⅱ型は、Ⅰ型の子供とⅢ型の大人が共存した中間的状況を示している。三者の地理的関係をみると、Ⅰ型は山陰沿岸、響灘沿岸、西北九州沿岸をむすぶ海岸地域に分布するのに対し、Ⅲ型は北部九州の内陸側平野部を中心に分布し、Ⅱ型は北部九州に近い西北九州沿岸にある（図1）。つまりⅠ型とⅢ型がはっきりと分布域を異にするのに対し、Ⅱ型は両者の中間地帯に分布している。三者の時期的関係をみよう。Ⅰ型では前期中頃から中期に継続する遺跡が多いのに対し、Ⅲ型では前期後半から後期前半に至るものが多く、Ⅱ型は両者の間に位置する（表6）。

以上から各型の関係を次のように整理できる。弥生時代前期中ごろ、子供と大人がそれぞれ異なる腕輪をはめる習俗が西日本の日本海沿岸部に登場し（Ⅰ型）、これが南海産貝類を入手していた

表4 子供用貝輪を中心としてみた弥生時代の貝輪使用情況（I）

使用型	No.	a	b	c	d
I	1	○ ◎			
	2	○ ◎	(●)	(●)	
	3	○			●
	4	○ ◎			○ ●
	5	○			
II	6		●	● ◎	●
	7			○	
III	8		●		
	9		(●)		
	10		(●)		
	11		(●)	(●)	
	12			(●)	
	13			(●)	
	14		(●)		

No.は表3に同じ。

貝輪使用型

I型：二枚貝・笠貝独占型

II型：二枚貝・笠貝共有型

III型：南海産貝輪共有型

貝輪記号凡例：

○：二枚貝貝輪

◎：笠貝貝輪

●：南海産貝輪

貝輪の使用情況分類

a：子供だけの貝輪

b：子供と男性の貝輪

c：子供と女性の貝輪

d：大人だけの貝輪

（ ）内は推定。

表5 子供用貝輪を中心としてみた弥生時代の貝輪使用情況（II）

例 数 1	8	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○							● ● ● ● ● ● ● ●
	5	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○							
	4								
	3								
	2								
	1								
	0								
使用情況	a	b・c	d	a	b・c	d	a	b・c	d
使用型	I 二枚貝・笠貝貝輪独占型		II 二枚貝・笠貝貝輪共有型		III 南海産貝輪共有型				

貝輪記号：○◎●はそれぞれ1遺跡例を示す

○二枚貝貝輪、◎笠貝貝輪、●南海産貝輪

使用情況：a - 子供だけの貝輪、b・c - 子供と大人の貝輪、d - 大人だけの貝輪

西北九州沿岸人によって、二者間の区別の曖昧な腕輪習俗に変化し（II型）、さらに前期末以降、北部九州平野部の人々に受容されて、結局子供と大人を区別しない单一的腕輪習俗が成立した（III型）。

I型の腕輪習俗の由来は、前述の笠貝貝輪と円形貝輪の検討をふまえると、朝鮮半島や中国に求めることができる。弥生時代初期におけるこうした外来の装身習俗をそのまま残したのが、貝輪をはめた古浦遺跡の幼児たちであった、と結論していいだろう。

表6 貝輪使用型別にみた遺跡の継続期間（弥生時代）

使用型	遺跡名	前期		中期			後期		
		中頃	後半	前半	中頃	後半	前半	中頃	後半
I型	古浦								
	土井ヶ浜								
	中ノ浜								
	宮ノ本山								
II型	前田								
	大友								
III型	深堀								
	伯堂								
	觀音堂								
	金隈								
	二塚								
	姫山								
	大道小学校								
	陣山								

最後に、子供と大人を区別する行為について若干触れておきたい。装身具に限ってみると子供であることを積極的に表示する行為は縄文時代ではなく、弥生時代になってから認められる。これを示す貝輪以外の最古の例は、福岡県カルメル修道院出土の弥生時代前期後半以前の子供の墓（木棺墓）でみつかった錫製の3個の小型腕輪である（山崎1976、山崎ほか1992）。錫製腕輪の着用は明らかに外来の習俗であり、貝輪において、子供の着用が外来習俗であると述べたことと矛盾しない。また弥生時代初めの環濠集落である福岡県板付遺跡には、外濠の内側に子供だけの墓地が2箇所あり、子供を大人の墓地から明確に区別している（山崎1990）。古浦遺跡でも子供の墓ばかりが列をなしているので、子供を区別する意識があったのかもしれない。弥生人は装身具以外でも、子供を区別していたといえる。

縄文時代にも子供を大人から区別する意識は存在した。子供専用の甕棺墓はすでに縄文前期に登場しており（菊池 1983）、また岡山県津雲遺跡の事例から、幼小児専用の埋葬地区を推定する説もある（春成 1981）。帝釈寄倉岩陰の再葬墓の未成人骨約20体（縄文後期）は、葬法も成人のそれとは区別したものであったという。一方、大人と子供の合葬、同形式の墓の使用など両者に共通する要素も多い。これらをふまえ、辻村純代氏は、中国地方の墓地において子供を区別する意識が縄文晩期まで継承されていたとすれば、これが弥生時代の子供墓につながる、という考え方を示している（辻村 1993）。

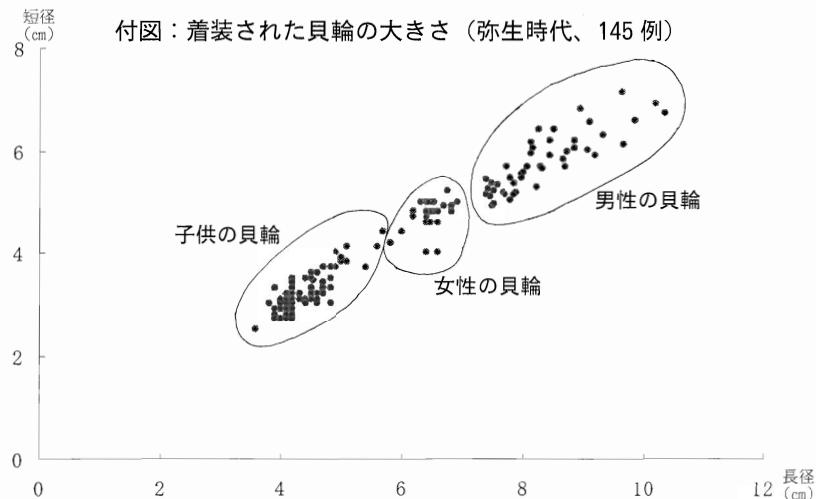
縄文文化の子供観が、弥生文化のそれとどう関係するのかはむずかしい問題であるが、腕輪習俗をみる限り、子供を区別する新たな考えが朝鮮半島から農耕文化とともに渡来していることは確かである。古浦遺跡の貝輪習俗は、渡来人がもたらした新たな習俗を端的に映し出しているとみるとができる。

古浦遺跡の貝輪について考察する機会を与えてくださった藤田等先生、ならびに鹿島町教育委員会の赤澤秀則氏に感謝申し上げる。また小稿を記すにあたって、下記の方々にご教示を賜り、各機関にお世話になった。記して感謝したい（五十音順、敬称略）。

網尾 勝、木村幾多郎、澤田康夫、高安克巳、中村幸史郎、春成秀爾、平野芳英、三島 格、水島稔夫、松下孝幸、山崎純男、国学院大学考古学研究室、土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム、福岡県那珂川町教育委員会、山鹿市博物館、山口県豊北町教育委員会。

《註》

(1) 本文中のいくつかの用語を、以下のような内容で使用する。人骨の年齢による区分は「成人・未成人」とし、成人は人類学でいう若年以上（13歳以上）、未成人は同じく小児以下（12歳以下）とする。「男性、女性」はいずれも成人男性、成人女性を意味する。貝輪の大きさによる区別は「大人用・子供用」とし、大人は先の成人に、子供は未成人に対応する。着装されていない貝輪を大人用か子供用か判断する場合、長径57mm、短径44mmを基準とし、これより小さいものを子供用、大きいものを大人用とした。この数値は、貝輪を着装する性別、年齢の明らかな人骨がはめていた145個の貝輪について統計をとり析出した（付図参照）。



- (2) 以前はゴホウラとされていたが、2004年に土井ヶ浜出土の貝輪を再検討した結果、小型の貝輪はゴホウラと同じスイショウガイ科のアツソデガイ製である可能性の高いことを確認した。アツソデガイ製であるとの明らかなものについては、素材名を改めた。
- (3) アツソデガイとゴホウラを比較する場合、貝殻全体をみると両者の区別は容易だが、貝輪に加工された場合の区別は面倒である。小型の貝輪について現在検討を進めている段階であり、ここではスイショウガイ科貝と表記する。
- (4) 島根県西川津遺跡で弥生時代の貝層が調査されているが、ハイガイは検出されていない（高安ほか1989）。ハイガイの生息等については島根大学理学部地質学教室高安克巳氏、前水産大学校網尾勝氏（いずれも1993

年現在)、千葉県立中央博物館黒住耐二氏のご教示をえた。また貝については、奥谷 1986、白井 1977を参考した。

(5) 佐々木古文化研究所資料

(6) 文献(三上 1971、475ページ)には、「大型の巻貝を輪切にしたもの」として貝輪の写真(第109図)を掲げている。この記述から貝輪が二枚目製でないことは確かのようである。掲載写真をみると、笠貝類の貝輪の可能性が高い。これについては、木村幾太郎氏も同様に指摘している(木村 1990)。

(7) この点においてわたしの考えは木村幾太郎氏と異なる。木村氏は前田山例を縄文的範疇の適応と解釈しているのに対し、わたしは外来要素とみるからである(木村 1987)。

《参考文献》

- 稻葉昭彦ほか 1979 「帝釈馬渡岩陰出土の貝製品」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査報告年報II』
- 新井新也 1915-16 「玉類・斎瓮及び弥生式土器を混出する石器時代の遺跡」『人類学雑誌』第30巻11号~第31巻2号
- 今橋浩一 1980 「オオツタノハ製貝輪の特殊性について」『古代探叢』
- 大和久震平 1966 『柏子所貝塚-第2次・3次発掘調査』秋田県・能代市教育委員会
- 奥谷喬司ほか 1986 『決定版生物大図鑑 貝類』世界文化社
- 折尾学ほか 1972 『福岡市金隈遺跡第二次調査概報』、福岡市教育委員会
- 金関丈夫・小片弓彦 1962 「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」『人類学雑誌』第69巻3~4号
- 金関丈夫ほか 1961 「山口県土井浜遺跡」『日本農耕文化の生成』
- 川原和人・内田律夫ほか 1989 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V』島根県土木河川課・島根県教育委員会
- 菊池実「甕棺葬」 1983 『縄文文化の研究』第9巻
- 木下之治ほか 1974 『姫方遺跡』佐賀県教育委員会
- 木下尚子 1980 「弥生時代における南海産貝輪の系譜」『日本民族文化とその周辺』
1988 「南海産貝輪はじまりへの予察」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集
- 木村幾太郎 1981 「貝輪」『大友遺跡』呼子町郷土史研究会
1987 「装身具」『前田山遺跡』行橋市教育委員会、112ページ
1992 「貝輪と埋葬人骨」『季刊考古学』第38号、60ページ
- 清野謙次 1969 『日本貝塚の研究』
- 九州大学医学部解剖学第二講座 1988 「九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人資料集成」『日本民族・文化の生成』六興出版、11~12ページ
- 草場俊一・金子浩昌ほか 1971 『貝鳥貝塚』花泉町教育委員会
- 金東鎬・朴九秉 1989 『山登貝塚』
- 隈昭志 1983 「熊本県山鹿市大道小学校出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第69巻第1号、熊本市教育委員会
1972 『熊本市東部地区文化財調査報告書』
- 小林行雄・馬目順一ほか 1975 『大畠貝塚調査報告』福島県いわき市教育委員会
- 澤田康夫・佐藤昭則ほか 1994 『観音堂遺跡群II 福岡県筑紫郡那珂川町大字片縄所在遺跡群の調査』中川町文化財調査報告書第33集、那珂川町教育委員会
- 潮見浩・岩崎卓也ほか 1984 『史跡中ノ浜遺跡』豊浦町教育委員会

- 七田忠昭ほか 1979『二塚山』佐賀県教育委員会・新郷土刊行会
- 正林護ほか 1989『佐賀貝塚』長崎県峰町教育委員会
- 白井祥平 1977『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星図書
- 高安克己・角館正勝 1989「西川津遺跡弥生層出土の貝類について」出典は川原ほか1989に同じ。
- 辻村純代 1993「古代日本における子供の帰属」『考古論集』潮見 浩先生退官記念事業会編
- 内藤芳篤ほか 1967『深堀遺跡』長崎大学医学部解剖学第二教室
- 中橋孝博 1985「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」『史跡金隈遺跡』福岡市教育委員会
- 長峯正秀・水島稔夫ほか 1987『前田山遺跡』行橋市教育委員会
- 乗安和二三ほか 1982『土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1983『土井ヶ浜遺跡第8次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1984『土井ヶ浜遺跡第9次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1985『土井ヶ浜遺跡第10次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1989『土井ヶ浜遺跡第11次発掘調査概報』豊北町教育委員会
- 1985『中ノ浜遺跡第9次発掘調査概報』豊浦町教育委員会
- 橋口達也・折尾学 1973「小兒骨に伴ったゴホウラ製貝輪—福岡市金隈市146号甕棺の調査」『九州考古学』47
- 春成秀爾「縄文合葬論」 1980『信濃』第32巻4号
- 東中川忠美・藤田等ほか 1981『大友遺跡』呼子町郷土史研究会
- 久村貞男ほか 1980『宮ノ本遺跡』佐世保市教育委員会
- 松下孝幸ほか 1993『土井ヶ浜遺跡と弥生人』土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム
- 松本彦七郎 1919「陸前宮戸島里浜の古人骨発掘につきて」『歴史と地理』第3巻1号
- 馬目順一ほか 1966『寺脇遺跡』いわき市教育委員会
- 1968『小名浜一小名浜湾周辺の遺跡調査報告書』いわき市教育委員会
- 三上次男 1971「豆満江流域における箱式石棺墓」『満鮮原始墓の研究』
- 森川昌和ほか 1979『鳥浜貝塚』福井県教育委員会
- 山崎純男1976『京ノ隈遺跡—福岡市西区田島所在の古墳と経塚の調査—』段谷地所開発株式会社
- 山崎純男 1990「環濠集落の地域性—九州地方」『季刊考古学』31、雄山閣
- 山崎龍雄ほか 1992『カルメル修道院内遺跡II』福岡市教育委員会
- 渡辺誠 1969「縄文時代における貝製腕輪」『古代文化』第21巻1号
- 渡辺正気ほか 1968『福岡県伯玄社遺跡調査概報』福岡県教育委員会

小稿は1993年12月に執筆したもので、今日のレベルでは内容やデータに不足する部分がある。可能な範囲で加筆修正したが、不十分さは否めない。表2と図1では福岡県春日市門田K35の貝輪、佐賀県袖比梅坂の貝輪、愛媛県松山市祝谷6丁目遺跡の貝輪、熊本県菊池郡合志町福原出土の貝輪、岡山県南方出土の貝輪が欠落している。また土井ヶ浜遺跡ではその後新たな資料が発表されているが、ここでは1993年段階のデータに基づいていることをご了承いただきたい（2005年3月）。